

講演会「パプアニューギニアの森の破壊と村人の生活の今～森は生命の源～」報告

7月7日(金) 18:30-20:30、大阪の聖パウロ教会で、「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」と「ウータン・森と生活を考える会」の共催で、ポール・パボロさん特別講演「パプアニューギニアの森の破壊と村人の生活の今～森は生命の源～」を開催し、24人の参加者と熱く語り合いました。

最初に清水靖子さん「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」(略して「パプアの森を守る会」)よりスライドを使っの説明があった。

太平洋諸島とのかかわりは、清水がミクロネシアに住んでいた1980年代、日本の原発からの放射性廃棄物を、ミクロネシアの海に捨てさせないという島々の住民と共なる活動から開始されました。その後、1994年に「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」を有志と共に立ち上げました。きっかけとなったのは、パプアニューギニアへのODA調査でした。私たちの税金が道路や橋やユーカリ植林といった日系3大伐採企業の環境破壊に使われていることを知ったからです。1970年から日商岩井や住友林業による伐採と丸太輸出がニューブリテン島で行われていました。

そのニューブリテン島から、今日はポール・パボロさん(46歳で7人の子どものお父さん)が来てくださいました。2か月前に双子の赤ちゃんが生まれたばかりで、来日に迷いがありましたが、日本の私たちに問題を訴えるために来日を決意なさいました。

ニューブリテン島南岸の中央部に位置するポールさんたちの森は、「母なる宇宙の最後の原生林の水の秘境」でした。森の奥地には、宇宙人にも見える珍しいコウモリが新たに発見されたり、世界最大級の洞窟、海岸に迸りでる滝や巨大な泉、満天の星空もとの海のなかの光る魚群、そこに暮らす子どもたちの笑顔…(スライドで紹介)

この地域は、「パプアの森を守る会」をはじめ多様なネットワークの力で伐採から守られてきました。しかし2004年から政府と企業と仲介人は、「極秘のうちに」原生林の土地を伐採企業にリースさせる準備を進めていたのです。幼い子どもや死んだ人の名前を記した偽りと不正の土地台帳を基に、SABL(スペシャル・アグリカルチュラル・ビジネス・リース)という99年リース政策で、ポール・パボロさんたちの土地4万ヘクタールは伐採権が発行され、森は強奪されてしまいます。企業は最大の熱帯材伐採企業リンブナン・ヒジャウ社です。2010年に伐採は開始されました。

村人は抵抗し、その抵抗の中心であったのはポールさんのムー村でした。企業は私兵のような警察を使って、抵抗する村々の子どもや老人にまでも暴力を奮いました。

2014年にポールさんたちの起こした裁判がいったん勝利を得て、伐採操業の一部差し止めがなされました。村人にとって、目の前から丸太が輸出されない日がどれほど嬉しかったでしょうか。しかし、リンブナンヒジャウ社は、命令を無視して、別の裁判を起こして、伐採を強行したのです。

一方、日商岩井は伐採に加え、村と地下水へのヒ素汚染を継続してきました。その実態を「パプアの森を守る会」が暴露しました。日商岩井は、汚染除去もしないまま逃げるように去って行きました。しかし現地からの丸太購入は秘かに継続し、ごく最近も双日(元日商岩井)や住友林業によるポール・パボロさんの地域からの丸太輸出が明るみにでました。

晃和木材(住友林業の子会社)は原生林を切りつづけ、ユーカリを植えて日本などに輸出を行っています。パプアニューギニア各地から湧き上がったSABL問題廃止要求の動きのなかで、去年は現地NGOが協力して署名を集め政府に提出した活動がありますが、その署名提出の中心にもポールさんがいました。

ポール・パボロさんたちの激しい抵抗にあって、2016年にギルフォード社は、伐採機材を引き上げたの



ですが、さらなる機会を狙っているのが今が重要なときです。継続しての裁判には、優秀な弁護士がついてくれます。

私たちの生き方が、ほんものであれば、不正で巨大な力は、いつか脆くも崩れるでしょう。私たちは、小さくて力がないように見えるけれども希望を持って諦めずに力を合わせるときにきっと勝利を得られることを確信しています。

ポール・パボロさんのお話し



ありがとうございます。ここにお集まりくださり、準備していただき、支援して下さった方々に感謝申し上げます。支援がなければここに来ることはできませんでした。今、私たちの土地で何が起きているかを分かち合い、他の方に伝えて欲しいと思います。私たちの土地は目の前で、盗まれ、レイプされました。私たちメンゲン語族にとって、土地は、森は、私たちに安らぎやアイデンティティを与えてくれるものです。でもその豊かさや精神の糧、ふるさとの森が目の前で破壊されたのです。

森は、私たちの伝統と儀式、薬、家を建てる材、タンパク源の糧でもありました。森の木で弓矢を作り、

タロイモを育てる棒をつくり、魚や鳥などの狩猟の道具をつくりました。

行事、歴史、伝統、昔話の中にいつも森がありました。私たちは経験の積み重ねの中で、森と密着した暮らしをしてきました。

長老から聞く森の話には、いつもワクワクさせられました。何にも縛られない自由が森にはありました。私が子供の頃、双子の兄と野鳥を追いかけた記憶があります。綺麗で透明な川の中で泳いだ思い出。小さな魚とゲームをしているような感覚でした。鳥のさえずりを聞きながら森を歩きました。森の畑から一緒に持ち帰った作物を皆に分かち合うのは当然のことでした。森の全てが私たちの学びの対象でした。

でもそれらの美しい経験は全て失われました…

私たちの森からの丸太が中国などに行くにしても、そこからの製品が日本で使われていることを知っています。合板、家具などです。また伐採企業が作った儲けの金が、さらに森の伐採に使われています。

世界に名だたる熱帯林の宝庫であるパプアニューギニアの森は、1950年から伐採されてきました。アジアや太平洋から熱帯材丸太を輸入する日本は、世界最大の合板の消費国。今、最大の輸出先は中国ですが、そこからの合板を日本が輸入しています。日本の合板消費は減ってはいません。

日本の建築様式では、家を30年で建て直すと聞きます。その後、また合板が使われ、さらに森が破壊されるでしょう。

私たちの森の直接の破壊者は、リンブナンヒジャウ社と子会社のギルフォード社です。同社は私たちの森から126万㎡の丸太を切り出して、542回船で運びました。一本の木を3㎡と換算すると、私たちの森から40万本の木が輸出されたこととなります。1億ドル以上の価値があるような、森の中で、私たちは今、泣いて暮らしています。

パプア全体の輸出量は、2014年は380万、2015年は381万㎡、2016年は360万㎡。そのほとんどが、リンブナンヒジャウ社による伐採です。

またあまり知られていないのは、価格移転操作というシステムです。港での送り状の記録は、低く見積もられ記載されています。数、値段、質といった点で、低く記載された内容のインボイスは、伐採企業や貿易会社の香港やシンガポールの支社で、秘密のうちに上積みされて書き換えられ、利益が蓄積されます。そうして蓄積された秘密の利益の一部は、パプアニューギニア政府などへの買収に使われるのです。

伐採企業への抵抗をつづける私たちに、企業が雇った私兵のような警察による脅し、子供や老人への暴力沙汰は酷いものでした。木の枝で叩きのめす、寒い夜にほったらかしにする。後ろ手に縛り、走らせる。こ

のような状況で私たちに、心と体に癒しがたい傷が残りました。美しい自然と未来が破壊されることを黙って見ることができない私たちは、森と大地を守るために非暴力で戦ってきたのです。

私たちは西欧の社会のような金で買える物は持っておらず、新幹線もジェット機も持っていませんが、私たちは世界で最も美しい森と自然を持っていました。しかし、それが2011年から2017年の間に失われてしまいました。私たちは、これを黙って見過ごすことはできません。

土地台帳なるものが、私たちを裏切った誰かによって、村人の知らないうちに秘密裏に作られていました。土地台帳には他の地域の人々の名前や、幼い子や赤ちゃんのサインまでありました。最初から知っていたら反対したのですが…。私たちには何一つ知らされていなかったのです。

今後の希望としては経験豊かでこれまで勝ってきた弁護士がついていてくれて、とても心強く思っています。私がリーダーとしてこれからも村人を引っ張って行きます。私たちを支援してくださり感謝しています。みなさんのご協力があれば、私たちの言葉を多くの人に伝え、政策を変え、私たちの力で小さな発展を起こし、自然、環境、文化を保ったまま、持続可能な資源とともに森を保ちながら、暮らしを発展して行くことができるのです。

どうぞ私たちの裁判が勝ち、土地を取り戻し、守ることができるように助けてください。伐採企業をストップすることに協力をしてください。私の話を最後まで聞いてくださり、ありがとうございます。神様が皆さまを祝福してくださいますように。

質疑応答

Q 伐採会社は、地元の人に雇用を生み出していますか？

A 直接村から雇用せず、機械を操作できる人をよその国から連れてきます。住民が雇われることは稀。ただ、仮に雇われたとしてもそれでいいわけではなく、最も大切なことは、土地を奪われないことです。土地を奪われた人が、奪われた土地で働くことなんかできません。

Q 住民間の対立はないのでしょうか？

A 最初の頃、そういったことが起こりましたが、奪われた土地で働くなど、もつてのほかであるということで、今は一致して反対しています。

Q 皆伐された土地の登記権、補償は支払われましたか？

A SMBLの政策下では、各地で企業と政府と仲介人が一緒になって土地台帳を作り、7～8年かけて進めることをやっています。慣習地土地所有制度の元では、土地を売れませんが、リースという形をとって伐採を可能にしているのです。(ポールさんの地域では母系の慣習的土地所有制度で、女性が生き生きしていて戦いの中心となっている)

Q 99年リースは非常に長いと思いますが？

A リースは自動的に99年になり、企業は飛びつくのです。

Q 政府の役所や役場は村の近くにあるのでしょうか？

A 村の近くにはなく、地方都市の役人はほとんどが腐敗していて、私たちへの協力体制はない状態です。

Q 役人は中央からやってくるのか、地元の人なのでしょうか？

A ほとんどがよそからであり、特に森林省関係は中央から来ています。

Q 伐採後にはアブラヤシ・プランテーションになるのでしょうか？

A 伐採後に同じ会社がやります。リンブナンヒジャウ社は、SMBLを使って伐採、その後アブラヤシ・プランテーションに変えるやり方を、マレーシア・サラワクとインドネシアと同じく、パプアニューギニアでもやっています。一見企業の名前が違っていても、裏ではリンブナンヒジャウの息がかかっているのです。

Q 裁判闘争に勝ったら、皆伐されてにアブラヤシ農園になった場所をどうするか？

A 裁判前からエコプロジェクトを始めていて、裁判に勝てば、元の在来種の森に戻します。



Paul's Story - Papua New Guinea for Global Witness

Fabio Erdosからもっと見る

次の動画を自動再生

「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」のホームページの冒頭にこの You Tube の URL があります。そこから日本語版を見ることができます。

ひと

熱帯林の保護を建材消費国で訴える

Paul Pavol

ポール・パボロ さん (44)

東京五輪を控えた都心で相次ぐ高層ビル建設が、母国パプアニューギニアでの熱帯原生林の伐採につながって見えた。切り出された原木は主に合板に加工され、ビルの建設現場で使われるからだ。

「快適さの追求のために、熱帯の森が奪われる実態を知って」。民間団体の招きで初来日し、大学などを回った。

ニューギニア本島で自動車部品の配送をしていたが、病で故郷の島に戻った。そこに現れたのがマレーシア系の伐採企業だった。

企業側は地元有力者と組み、99年間の土地の賃貸契約を地主と結んだことになっていた。ところが台帳を調べて偽造がわかった。99%の地主名が虚偽で、生後1

カ月の乳児の署名もあった」先頭に立って抵抗した。3年前に裁判で「一時操業停止」を取ったが、実際に伐採が止まったのは昨年秋のこと。すでに6年で約40万本が切り出されていた。

故郷の森を守っても、国全体の原木の輸出は減らない。主な輸出先は日本から中国に代わったが、加工品の消費地は日本だ。

1男6女の父。5月に生まれた超未熟児の双子の画像を、携帯電話に保存して持ち歩く。

違法伐採は後を絶たず、温暖化を防ぐ国際社会の取り組みも鈍い。「森は命の源。消費地の次世代が環境を考えて暮らすことが、私たちの希望になる」

文・山浦正敬 写真・相場郁朗

ポール・パボロさんの記事が7月8日の朝日新聞に掲載されました。